

令和３年度 第１回総合教育会議 会議録

日 時 令和４年３月２８日（月） 午前９時３０分から午前１０時３５分まで

場 所 加悦保健センター（元気館）２階 農事研修室

出席者 山添町長、長島教育長、岡田教育委員長、樋口委員、酒井委員、佐々木委員、
柴田教育次長兼課長、植田社会教育課長、高岡総括指導主事、井崎係長
長島総務課長、中田課長補佐

担当	内容
長島総務課長	それでは開会に当たりまして、町長からご挨拶をいただきます。
山添町長	皆様おはようございます。令和３年度の第１回目となります、総合教育会議ということで大変お忙しい中ご出席いただきありがとうございます。 また大迫先生におかれましても年度末の大変お忙しい中、Web 形式ということでありますが、ご参加をいただきまして本当にありがとうございます。 先ほどございましたように、時間が５０分程度しかないということでございますので、皆様方のお力添えをいただき良い時間にしていきたいと思っております。よろしくお願いいたします。それでは、本日の議題は、「高校の魅力化推進事業の取り組みについて」ということでございます。 本事業につきましては、小中学校で推進をしてきました、ふるさと教育、キャリア教育などの地域に根差した教育を高校においても継続的かつ効果的に織り交ぜ、唯一の高校であります宮津天橋高校加悦谷学舎の魅力化を支援していくというものであります。 本町と京都府立ということで立場が異なるわけですが、協働で取り組んできた事業であります。 本事業のこれまでの内容についてご報告をさせていただいた上で、皆様方からご意見をいただくことができればと考えております。 それでは、どうぞよろしくお願いいたします。
長島総務課長	ありがとうございました。それでは議題につきましては、町長の進行でお願いしたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。
山添町長	それでは、協議を進めさせていただく前に、長島教育長が就任後初めての総合教育会議となりますので、大迫参与とも初対面ということでございますので、長島教育長から自己紹介や現在の心境などお話いただくとありがたいと思います。よろしくお願いいたします。
長島教育長	大迫先生、７月に教育長に就任をいたしました長島と申します。よろしくお願いいたします。先生とは秋に平田オリザさんのことで、メールのやり取りを少しさせていただいたことがございます。 本日、高校魅力化推進事業につきまして、先生のいろんなご助言、そしてご指導をお願いしたく思います。私は３月まで高校の校長をいたしております、本町のこの高校魅力化推進事業の取り組みを真似る形、学ばしていただく形でコーディネーターを活用しまして、地

担当	内容
	域とのつながりに取り込んでまいりました。 そういう点で、本町の教育長に赴任をいたしまして、この魅力化事業につきましては強い思いがございます。この後のお時間、先生のご指導をよろしくお願いしたいと思います。お世話になります。
山添町長	それでは、先生からは説明後にコメントをいただくことになっておりますので、その際にまたお話を頂きたいと思います。それでは、早速次第に沿い協議を進めさせていただきます。 「①高校魅力化推進事業の取り組みについて」ということで、資料を事前にお配りをさせていただいておりますので、事務局から説明をさせていただきます。
井崎係長	社会教育課の井崎といいます。よろしくお願いします。それでは説明をさせていただきます。高校魅力化推進事業は、地域の学生の中で、社会にもっとも近い高校生と、地域住民がまちの魅力や課題を共に考える機会を作り、大人は将来、子ども達が帰ってきたいと思えるような地域を作りたい。高校生は地域を盛り上げるために頑張りたいという双方の意欲の向上を目的として実施しております。 本町では、平成29年度から予算化を始め、令和元年度からは高校魅力化コーディネーターを常駐配置しまして、高校との関係強化に取り組んで参りました。 今日は、今回、策定をしました「魅力化ビジョン」を通じて本事業の説明をさせていただきます。 まず、第1章ですが、高校の現状と魅力化ビジョンの必要性を記載しております。加悦谷高校についてですが、今から74年前に、地域住民、教員、当時の8ヵ町村、京都府による協働によって創立されました。 ここに加悦谷高校の創立25周年記念誌の冊子があります。こちらを読みますと、この地域には高校が無い。だけど無いのなら作ろうじゃないかという当時の人たちの情熱、チャレンジャー精神と同時に、高校にかける強い希望、夢、期待を感じ取ることができます。 加悦谷高校は少子化の影響で、令和2年度から隣の宮津高校と合併をしまして、宮津天橋高校加悦谷学舎として新たな歴史を刻むこととなりましたが、与謝野町にとっては町内唯一の高校であることに変わりはありません。 風が吹けば桶屋が儲かるという言葉があります。高校は府立ですので、町は関係ないという見方もできるわけですが、実際、高校はその町にとって財産であり、生命線でもあります。 これを理解している町は、今、全国で魅力化という名称で必死になって地元の高校を守ろうとしております。文部科学省の統計によりますと、この15年間で、全国で廃校になった公立高校は1,000校を超えます。 民間のシンクタンクが、高校がなくなった町と高校がある町の比較検証をしておりますが、やはり高校がなくなった町の方が人口減少は加速をしております。 また、総務省の統計によりますと、与謝野町は京都府内で下から4番目に平均所得の低い町となっております。 町全体の所得が低い中で、この町から高校がなくなり、全員が町外の高校に通うことになれば、交通費ですとか、送迎にかかる経費、その送迎にかかる時間を労働に充てることができた場合の収入的損失などを考えますと、経済的な格差が、教育、子どもの学歴に及ぼす影

担当	内容
	響はますます広がっていくのではないかと推測されます。 さらに私は、教育委員会の前に税務課に所属をしておりましたが、親が経済的に無理をして、高校よりさらに上の学校に行かせて、その学費や仕送り等で滞納になったケースも見てきました。 一旦、滞納になって健全な状態に戻る確率というのは約3割です。そして、税金の滞納と奨学金の滞納、これは強い相関があります。 この流れが進みますと、税収や奨学金の減少につながり、今後の行政運営全体にも大きな影響を与えることが危惧されます。 逆に、町に高校があつて、それを町が活かすという政策を実施した場合、魅力化の先駆けである島根県の隠岐島前高校の取り組みを民間のシンクタンクが調査しましたところ、約3,000万円から4,000万円の経済効果と、Uターン率も約10%上昇したという結果が出ております。 もう1つ、これは福知山公立大学の調査ですけれども、将来のUターンと18歳までに町の魅力を理解していること、もう1つ、18歳までに町にどんな仕事があるかを知っている子どもには強い相関があると言われております。 取り分け、私の年代はいわゆる第2次ベビーブームの世代で、その親は団塊の世代と言われる世代の人たちになります。我々の親は、長男は家を継げと言われた世代で、我々は地元に戻ってこなくてもいいと言われて実際にそうになりました。 ですので、我々の世代としては強制でも諦めでもなくて、この地域の子供達に、「この町の未来を一緒に作ろう」という、これまでどの世代の方も言ってこなかった地域の思いというものをしっかりと伝えていきたいと思っております。 次に、この間、町と高校でどのような学びを作ってきたのかについて説明をさせていただきます。主に探究学習、キャリア教育、進路講習の3つを軸としまして、これらの全てに地域の思いという要素を盛り込んだ学びを作って参りました。 探究学習については、学校評価アンケートの中で約7割の生徒が地域に対する愛着度が向上したという回答がありました。キャリア教育については、元々、地元就職率が6割以上という高い実績がありました。そこに、地域にはこんな仕事があるということが分かる取り組みを作りまして、地元の商工業者の方々とのつながりを強化しました。現状として、京都市内とそれからの丹後地域の有効求人倍率はほぼ同じです。 しかし、その職種となりますと、丹後地域は圧倒的に少ない状況であるため、帰ってきたいと思ってくれる子どもが増えても少ないパイのいす取りゲームになってしまいますので、今後は仕事がなければ作ろうじゃないかという「0」から「1」を産み出せる起業家精神を育成していくような学びを推進していく必要性を感じております。 進路についても将来、上の学校で得た知識をこの地域に還元してほしいという期待を込めまして、外部専門家に委託して総合型選抜対策講座を実施していますが、この講座を受講した生徒の6割が将来のUターン、地域貢献を意識しているという回答がありました。 その他にも町長との対話事業の中から生徒の発案で高校生が町の魅力を取材して、町の公式 Facebook で発信をするという事業が立ち上がった他、町が主催する産業振興会議や地域

担当	内容
	デザイン会議にも生徒が参加するなど、町の中でも高校生の存在感は確実に高まってきております。 平成29年度以降、こと生徒の一生に影響する教育にかかる取り組みですので、慎重にじっくりと進めてきたわけですが、本事業に取り組むことで、生徒の意識というものが数字として見えるようになったということは1つの成果だと考えておりますし、これからはその見えるようになったものを確実に前に進めて、将来の地方創生、地域活性化の実現へとつなげていくことが問われることになります。 そこで、今年度に、今後の魅力化の指針となるビジョンを策定することとしました。 ちょうど1年前に高校の全体職員会の場で話をする機会を作っていただいて、私の方から先生方が生徒の将来を真剣に考えておられるということはよくわかっています。ただ、生徒の未来に加えて、地域の未来も見通せる広い視野を持った先生と一緒にビジョンが作りたいというお願いをしましたところ、4名の先生から立候補がありまして1年間議論を重ねてきました。 今回、策定しましたビジョンをシンプルに説明しますと、1つはこれまでに作ってきた魅力的な学びを見える化したこと、もう1つはこの学びが何を目指しているのかという方向性を見える化したことの2つに集約できると考えております。 第2章では、その基本理念、基本方針、期間を記載しまして、第3章では、町と高校が協働して実施する人づくりの体系、施策を記載しておりますが、今後は、これまでの取り組みに加えて、卒業生とのつながりの強化、それをまた指標として測れるようにしていきたいと考えております。 第4章では推進体制と役割分担について記載しております。教員、行政、地域とそれぞれに特徴があるわけですが、あくまでも魅力化は教育の中にあるものですので、まず生徒の成長が第一で、その成長を町や地域が支えることによって、結果として、将来の地方創生、地域活性化につながっていくという目的の順番の共有を前提として、お互いの強みを活かせる体制、人が入れ替わっても持続していける体制を確立したいと考えております。 まとめに入りますけれども、まちづくりにはいつの時代にも変わらない原理原則というのが3つありまして、それは行財政改革、仕事づくり、人づくりです。特に、町は人がいないと成立しませんので、まちづくりは人づくりと言われるぐらい教育は重要な要素となります。 これは江戸時代の話ですけれども、長岡、米沢、長州という3つの藩は、財政的に最も苦しい時期に何をしたかと言いますと、学校を作りました。そして、その学校は今でも高校として続いております。 歴史は繰り返すという言葉の通り、本町が魅力化のモデルとしております、島根県の海士町においても、財政破綻の危機に陥ったわけですが、同じ取り組みを進めることによって今に至っております。本町においても、今後は策定したビジョンに基づいて、先人のように、より一層、地元の高校、地域の子ども達に期待を込めて、我々大人も共に学びながら将来の希望となる人づくり、将来の人材の環流、自給自足につなげて参りたいと考えております。 最後に第2章の基本方針にも記載しておりますが、イノベーションというのは今あるもの

担当	内容
	の組み合わせで起きると言われております。そういう意味では、本事業もまた町×府立高校という新たな組み合わせの1つであろうと思っております。 ただ、このイノベーションというものは、本来もっと地味で素朴でヒーロー不在のものでよいと思っております。今回のビジョン策定にあたっては、教育委員会議においても、町の議会においても、途中経過を説明させていただいて、それぞれに建設的なご意見をいただいております。 ラグビーのスクラムのようなイメージになりますが、与謝野町としてはみんなが考えを出し合って、地味で素朴だけど、確実にこの地域の子どもたちの成長につながる魅力化、みんなが関わって良かったと思える魅力化を目指していきたいと思っております。 事業の説明としては以上です。よろしくお願いいたします。
山添町長	井崎係長ありがとうございました。 それでは、長島教育長からも本事業に対する思いなど補足する点等ありましたらよろしくお願いいたします。
長島教育長	井崎係長から本事業の今までの経緯などの説明がございました。 それに加えますのは、この事業は京都府で初めての事業でございます。京都府を外れましても、島根県等の先行事例はございますが、この近畿におきましても少ない事例の中のひとつでございます。そういう意味でこの事業に対して京都府教育委員会も大変注目いたしております。私はこの事業が始まりました時に、先ほど申しましたように隣の町で校長を務めておりました。コーディネーターを任用するという与謝野町の動きを知りまして、市の方に掛け合いまして同じように学校の方にコーディネータを配置していただけるように取り組みました。丹後地域においては与謝野町の先行事例を受ける形で他の市町の方も同様の動きで取り組んでいるところでございます。 目指すところは、与謝野町の思いと同じでございます。ただコーディネータの任用に当たりましては、中々人による部分でございますので、そのあたりを苦労しているのが現状でございます。 この魅力化事業、そして策定しましたビジョンの方がうまくどうなっていくかは、もちろん財政的、町の姿勢もありますが、具体的にそこに関わる人の問題、コーディネータ的位置づけの人、その部分に左右される部分が大きいかなと感じております。 ただ、この問題、取り組みが地方創生、地域の課題を解決する一つの方法で有効であるということは間違いのないと思いますので、先行事例になるように今後も努力していきたいと思っております。以上でございます。
山添町長	ありがとうございました。それでは大迫先生からは事前に「与謝野町高校魅力化ビジョン」に関連してということで、資料提供いただいておりますので大迫先生からも資料のご説明をお願いできればと思います。
大迫参与	事前に魅力化ビジョンの資料を送付いただき、丁寧に読ませていただきました。 非常に思いのこもった熱量のある議論を長い時間かけてやっておられたという強い印象を受けました。愛郷心という言葉が出ていましたけれども、初めて聞いた言葉ですけども、まさに愛郷心に基づいた議論、そして様々な取り組みをなさっているというふうに感じまし

担当	内容
	た。私が皆様にお話しするのは、そのビジョンの内容ではなくて、これは皆様方がこれまでの時間の中で真摯に取り組まれた結論でありますので、その内容に触れるのではなくてそれをより具体的な形で実践するための方法、ひとつのアイデアというかサジェスションというか、ヒントというかそのようなものをお話しさせていただきます。 それをキーワードとしまして、「個」という言葉と「主体性」ということばを挙げております。書いてございますように、方法論のお話としてお聞き願えればと思います。 最初に「個」の方でございます。 これは、繰り返しになりますが、今回のビジョンづくりのベースにあるものは、生徒たちが減っているということですよね。 これに対しまして、逆に生徒が減っていることをチャンスに捉える。中々表現として難しいですけども少人数であるからこそできる教育というものを考えてみたらということで、一つ提案というかアイデアとして、個別時間割の作成ということを定義しております。 具体的には、例えば月曜日にいたしましょうか、1時間目は、国語A、社会A、数学Aがあります。例えば国語Aは現代文が中心であるとか、社会Aは近代が中心であるとか、数学Aは何々の部分を特にやるとかという形をイメージしていただければと思います。 2時間目も同じように、国語・社会・数学を置いておき、国語Bでは説明文を中心にするとか、社会Bは江戸時代を中心にするとか、というような形で内容を変えながら、3時間目も同様で、4時間目に関しましては、芸術を置いておりますけども、これは全国の高等学校で同一展開している芸術教科であります、そこにちょっと入れていますのは、アンスケジュールという授業を自分でテーマを決めてやる、教科ではないアンスケジュールという時間を設定しています。自分でいろいろなことを計画して自分の将来に繋がるような準備をしたり、図書館にいったり、実験をしたり、自分達で出来る自由な時間。5時間目にも探求ということでA、B、C全部内容が違って、アンスケジュールも置いています。アンスケジュールでは、例えばスポーツをする方であればスポーツのトレーニングを開始するという形の使い方をしてもいいかもしれません。皆さん大学の自習の時間を思い出してください。 今、実は私の大学でも新年度の実習の真っ最中ではありますが、一つのコマの中に、沢山の教科がございます。その中から自分はこれを取ろう、2時間目はこれを取ろうということで選択したと思います。このような大学のようなスタイルで、日本の一般的な高等学校の時間割のようなものではなくて、大学のようにそれぞれのコマから生徒たちが自由に時間を取っていく、これは1学年に何百人というような学校では絶対にありえないのですが、小さな学校ではできます。 実は私が校長をしておりまして、千里国際学園という大阪の箕面市にあります学校ですが、そこでこれを作ってやりました。一人一人が自分に合わせた時間割を持っているという、30人全員が30人別々の時間割を持っていて自分の趣味、興味に合わせた時間割をもっているというようなやり方になっています。自分だけの時間割を持っているということです。 続いて、次のテーマ「主体性」ということで、授業選択の段階から自分で選んでいくということ、与えられるということに慣れている状態から、自分でいろいろと選んでいくということ、時間割の段階からしていくということ。今回のビジョンとともに高校生が自分のも

担当	内容
	のにしていく何かきっかけの一つになればと思っています。 そして、そういうことをやらせてもらっているということに関して、自分たちはまかされている・信頼されているという、自己肯定感を生み出すことができる。そしてこれをやると自分で選んだことであるからしっかり学ばなければいけない、与えられた、いやいややっているのではないというような意味で、学びのレスポンスビリティ、責任というものが生み出されるというプラス点があります。実際、これは先ほど申し上げた私のやっていた学校の生徒達が獲得していったものになります。 さらに、この個別時間割を運用する中で、可能性としてあるのが2つあって、一つは、中間・期末の定期講座というものを廃止していく、授業が個別に時間割がありますので、試験の段階で一斉となっていくというのではなくて、授業の中で、例えば国語のAでは5月の30日にまとめの試験をやりまよ、というふうに授業の流れの中でいいタイミングで評価のための考査をしていくということで、これは何を申し上げたいかといいますと、日本の高校の教育の中で、慣習的に行われていて、本当にこれはやり続けなくてはいけないのかと問うと、いろんなイノベーション的な発想で高校教育が組み立てることができる。場合によっては、言葉が適切かどうかは分かりませんが、定期考査は廃止するという形ができるわけです。より深く子ども達の力に密着した、かつ彼らの学びを少しずつ評価していくことができいくということで、定期考査を廃止することで逆に彼らを支えていく方向になる可能性があります。 フリースクールという言葉がありますが、フリーということで日本では勝手にやっているという意味合いになるかもしれませんが、本来的にフリースクールというのは、いままでのやり方から、自由であるという意味なんですよ。ですから、フリースクールの発想、今まで縛られていたものに対して、違う形でやる方がもっと子ども達に良いのではないかと発想が、このビジョンを展開していくときに役に立つ発想ではないかと思いました。 それから混ぜることの効果、すでに校外で様々な活動をされていて、混ぜること、混ぜることを十分に含んだ事業になっているという印象を受けましたが、例えばこの個別時間割の中で探求というものがございました。探求のテーマとしては、井崎係長からの話にもありましたけども、例えば探求でしたら無学年生授業で行えます。例えば場合によっては、英語は、第1言語になっている生徒が少なからずありますのでその子たちは、高一から高三まであるコマと一緒に授業するなど、アカデミックな科目でもできないことは無いし、必然的に体育などは混ぜてやっていることもあると思いますが、混ぜるということは、いいのかもしれないというふうに考えます。 それでは「主体性」ということでお話をさせていただきます。 この主体性というものを育てるにあたっては、教師の役割というものが非常に重要で、ここをどう変えるかっていうことによって、高校生が主体的に将来の選択を、主体的にできる基盤を高校時代に形成してあげることが、できるかどうかで決まっていくように思います。 これは、与謝野町の会議で使いました資料から修正を加えた新しいものになりますが、国際バカロレアの解説に大学1年生に使う資料になりますが、教師の主導型指導、これは従来からの形であって、これはこれで悪いことはなくて先生として子ども達にいろいろなことを

担当	内容
	教えてあげないといけないという先生の役割は、もちろん無くなるはずはないのですが、今まではこれがほとんどで、右側の先生は学びを支援する、生徒中心型学びといいますが、従来通りの先生から与えられて育っていくとなると、せっかくこのビジョンに掲げているものも、与えられることによって自分のものにしていくのと、本当に自分から自分のものにしていく形で、このビジョンに掲げられているものを育てていくのか、ここは非常に大きな分かれ目であると思います。高校生達が本当の意味で、皆さんがビジョンに描かれたものを自分のものとして獲得していくためには、できるだけ先生が今までの役割から違う役割を担っていかないと本当の意味で育っていかないのではないかと思います。 今申し上げましたように、与えられることに慣れている状態では、ふるさとを離れた後の自分の人生の中で大事な主体性というものが本当の意味では育っていかないだろう。そのためには、本当の意味で主体性を高校生の時代に育ててあげるためには、自分たちで考え行動するための機会をできるだけたくさん与えていく、その中で先生の役割が生徒たちをサポートしていく、ナビゲートしていく形に変化していくことによって、このビジョンに掲げるものが自分たちのものとして獲得できるのではないかと、具体的には先ほど申し上げました、個別時間割により将来の事業精神に繋がっていくのではないかと思います。また部活動なんかももうすでにやっておられることでもありますが、指導者が全部を決めてやるのではなくて、自分達で考え行動する部活運営、あるいは校則の見直し、教育の世界では話題になっていますが、与えられているものの典型のものです。 天橋高校にも校則があり、それを反故することは難しいと思いますが、私がやってきました学校では、インターナショナルスクール的要素、あるいはインターナショナルスクールそのものでしたので、日本的な校則は一切ないんですよね、というかできないんですよね。例えば、ピアスなんかも赤ちゃんとして生まれたらすぐに付けるという国のお子さんもありますし、髪の毛なんかも、目の色もいろんな子がいるわけで頭髪は黒というルールはまず言えないし、インターナショナルスクールというのは、世界中に通ずるものしかルールとして持てないので校則は一切ありません。でも学校はきちっと動いていきます。そういうふう考えた時に、校則っていうものを見直していく、ただ全体を0にするということは難しいでしょうから、生徒達が校則を運用するためにはどうやったらいいのか、ガイドラインというか自分たちが作ったルールとして校則的なものを認識していくことも重要なことかもしれません。それから郊外活動についても生徒達が主体でどんどん決めていくというようなタイプにしていく、先生はそれをサポートしていく。 そういうような形で、とにかく先生は、先生主導型というものは先生が全部シナリオを描いてあげている。50分の授業は、こういう風に初めて、中はこうで、最後はこうまとめてこの50分をやろうというのが教師主導型なんですけども、途中の生徒の発言も先生が描かれた50分のシナリオの中でその発言を利用しているに過ぎない。本当の生徒中心型の授業であれば、生徒の発言から授業が変わっていく形、そこからより深く授業が変わっていく形になっていくところが教師主導型と生徒中心型の学びへの具体的な変換点ですが、郊外活動においても同じようにできるだけ生徒たちが自分たちでいろいろと考えていくそのためには、デジタルネイティブと言われている高校生の持っている世界観、広がりというのはとっ

担当	内容
	でも重要だというふうに考えています。 彼らに自分達でやってごらんと言ったときに、彼らはテクノロジーを活用して思いもよらない提案をしてくるかもしれません。そういう時がサポートしてあげるタイミングだと思っています。 私自身、今教育について考えながら進めているのですが、限界を感じる部分がある。それはなぜかというデジタルを十分に活用できる人達と私の考えることは、差を感じる部分がある。今回の議題についてもどちらかというところDXと言われている要素がそんなに入っていないなと感じました。 それは集まっている方々のジェネレーション的な背景が一つの要因かもしれないと思うのですが、それはそれで内容自体問題はないのですが、ただそういった世代の人が入ってくると、やっぱり全然違うということもあってとても重要な認識だと思っています。 ですから高校生達のデジタルを使った発想は大事にしてあげたい。今年6月に次の本が出るのですが、これは人口知能の若い研究者との共著です。彼に彼の立場から教育について少し語ってもらってそれをベースに私が新しい教育の設計図を描くという本を書き上げているんですけども。その人口知能の研究者、名前の知れた方ですけども彼との共著は私にとっても非常に大きな刺激になりました。そういった形で、大人には分からない、テクノロジーをうまく活用した発想も大事にしてあげて、使えるものは使っていくのがいいのではないかと考えました。 最後に大切なのは一貫性とバランスです。一貫性というのは、例えば主体性を育てようということで、時間割を自分達で作リ、授業も生徒中心の中でやろうという形の時に、例えば部活動は全然違う形とか、授業によって全然違う形になるということは、本来意味での深い学校全体の目標の実現ということは難しいと思っています。もちろんそれぞれの学びの性質によって、生徒の中心型授業の作り方は違って当たり前の話ですけども、それと全く真逆のことが行われているという時間は、学校の中で持たないように先生方は、意志は統一しておくことが大事であろうと考えます。 バランスというのは、今申し上げましたような今日の提案で、例えば教師主導型の授業を0にするということは難しいですよ。だけれども教師主導型が100ということは、恐らくこのビジョンの実現には矛盾すると思います。何割ぐらいでやったらいいかというバランスをみんなで考えながらやっていく。完全に生徒中心型ですべてやっていくことができた時にはそれは成り立ちます。ただそのようなバランスを常に考えながら、今日申し上げた生徒の主体性を育ててあげる様々なアプローチをそのバランスの中で考えてあげることがいいのではないかと、今回の皆様方がまさに熱量のある議論をされた中で描かれたビジョンを読ませていただいた後、私が少しお話できるかなと思ったことでございます。 本日はありがとうございました。
山添町長	大迫先生ありがとうございました。 大迫先生からいただきましたご提言につきましては、この間私共がまとめてきました高校魅力化ビジョンを具体的に実現していくための方法論ということで、二つの視点からお話をいただくことができたかなと思っています。

担当	内容
	先ほど大迫先生からいただきましたご提言、視点という観点でこちらの委員の皆様方から何かご質問なりありましたら、ご発言をよろしくお願ひしたいと思います。いかがでしょうか。
長島教育長	教師主導型から生徒中心型へということでございます。学校の現状、ここのところの変化というのは小・中におきましては、GIGAスクールが入ったこと、主体的・対話的深い学びという形で、従来の教師主導型から児童生徒中心型へ移行しつつあるということは、これは確かなことではないかなというふうに感じております。 同様に探究活動におきましては、生徒主導型でございます。高校魅力化推進事業につきましては、地域と繋がっていく地域の探究ということで、まさに先生がおっしゃっていただいています生徒中心型、そこに教師の方がサポートとして関わっていくという形で魅力化の方は進んでいるところではないかと思ひます。ただ、後に申されました、DXの視点ということは、この魅力化ビジョンの中には、しっかり入れていくことは出来ておりませんのでなるほどなあと、今後のことを考えた場合、生徒の生きていく未来社会のことを考えた場合に、高校の時にもう少し取り組んでいくことが必要な部分として、またこれは高校との検討事項かなと思ひております、ありがとうございました。
山添町長	先ほど、長島教育長からもコメントがございましたけども、私の方から、長島教育長にお伺ひしたいと思ひましたのは、例えば府内の公立高校において、個別時間割の問題については、議論がどの程度進んでいるのかまた、実践例という観点でいうとどういう状態にあるのかということについて、少し認識を合わせるといふ意味でも現状を教へていただきたいと思ひます。
長島教育長	京都府内の府立高校において個別時間割を作っている、生徒一人一人の時間割があるというのは、総合学科、それも昼間の二部制、三部制の定時制高校においては、そういう形に近い個別の時間割を作られています。それ以外の高校におきましては、選択科目というのはございますが、それは全ての時間割の中の3分の1程度が、それぞれが選択できる科目はありますが、それ以外は必須科目ということで選択できない形になっております。 京都府内で、個別の時間割に近いものが出来ているのは、府立の高校ですと2校だと思ひます。それは2部制、もしくは昼間定時制の体制の高校でございます。
山添町長	ありがとうございます。それではその他の教育委員さんから何かご質問なり、ご意見などありましたらよろしくお願ひします、いかがでしょうか。 それでは樋口さんご感想でも何でも
樋口委員	あの個人的な感想というか体験談から少しお話をさせていただきます。 大迫先生ありがとうございます。教育委員の樋口でございます、ご無沙汰しております。 私、実は与謝野町内で生まれ育っておりません、京都市内で生まれ育ちまして、市立高校だったんですけども、実は選択の時間割を今から数十年前になります、私はそういった高校に通っておりまして。普通科になります、例えばホームルームで会うクラスメートには久しぶりだねという感じです。自分なりの時間割を作っていたものですから、何々君今日はずっと一緒だったねということがほとんど無かった学校でした。体験談で言うと正直言ってやる気のある生徒、やる気の無い生徒の格差がすごかったです。だから本人が学ぼうとする

担当	内容
	人たちはどんどん自分のスキルを上げていく、そのために自分の選択した授業を取っていった目的を持ってしていくのですが、残念ながら私は何を取っていいのか、何をどう探求すればいいのか分かっていない状況でしたので、そういった学校に行きながらも、その効果を感じることなく３年間過ごしてしまったというのが、今思いがあるところで。 せっかくお話をいただいたところで水を差すようなお話になって申し訳ないですけども、本人の意欲というところが大変重要になってくるのではないかと、お話を聞いて感じました、以上です。
山添町長	その他、どうでしょうか。
岡田委員	大迫先生お久しぶりです。岡田です、お世話になっております。 今のご説明を聞いて、自分のそれこそ半世紀前の大学で授業を取った時に、１・２年で沢山取っておいてということ先輩から話を聞いて、その時にどうしていいか分からなかった自分をちょっと考えてみますと、この高校に入った時点で選択科目をする場合には、もう小学校、中学校からそういうふうに分けて自分で選んで学ぶという姿勢を身につけさせておかないと、高校に入ってからすぐに選択で、自分が何に向かっていくのかということを考えさせたのでは遅いのかなという印象を受けました。もしもすぐにはこんなことにはなるとは思いますが、将来そういうふうに向かっていくのであれば、もう小学校・中学校からもっと自分で将来何をするか、どういうことをしたいかということ、学ばせていかないと中々高校に入ってからすぐに１５歳で選択していくということは、昔から商業高校、機械科等、いろんなことを中学校の時に選択はしていくのですが、本当に授業を取っていくようになるには、そういうことも含めて、中学校の時代からそういう子ども達を作っていかなければと感想を持ちました。 それと４月から成人が１８歳に年齢が引き下げられましたので、そういうことも含めて高校では、政治経済とかもそういうことも視点に入れた授業も必要になってくるのかなと、高校魅力化とは関係ないのですが、そういうことも含めて今後は子ども達に指導していくべきと感じました。
大迫参与	ちょっと補足よろしいですか。 個別時間割について少しご意見いただきました。システムを動かしていくにはバックアップしてする体制が必要で、例えば私がやってきたところでは、必ずコースアドバイザーという先生を何人か配置して生徒達は自分達だけでは分からないです。このコースアドバイザーとのやり取りの中で、自分が主体的に関わっていくということを教わる第一歩にしてあげないと、たぶんそういう制度だけど分からないからこうしちゃおということで主体性を育てるということとは全く無縁な形で個別時間割という制度が単に形骸化してしまう可能性があるというふうに思います。 大事なのは最初に、コースアドバイザー的なそういうサポーターがちゃんとして、そこで一緒に考えていってあげる、そこがとっても重要なこの制度が有意義なものになるための重要な仕組みであると考えています。以上です。
佐々木委員	感想になるのですが、従来のやり方と、先生のご提案いただいている個別時間割というのを融合させていくっていうのも一つなのかなと思って私は聞かせて頂きました。

担当	内容
	例えば言われるように１年生ではどうしたらいいかわからない、それでは１年生では従来の時間割を組んで、２・３年からは自分で選択していく、そうしたら２・３年は、２学年制みたいな要は大学のイメージで私は聞きました。という形がありなのかなあっと思いました、高校魅力化ということなので新しいことも取り入れてということは一つだなと感じました。ありがとうございました。
酒井委員	先ほどお話を伺いまして、ちょっと思い出しましたのが、先日ある大学の関係者の方で採用や広報を担当されている方にお話を伺ったんですが、その方は以前は高校生を対象にアピールしていたのが、今は中学生じゃないと高校生ではもう遅いという話をされていたのを思い出しまして、やはり自主的にものを決めていくということが今までは、高校生の段階で進路を選ぶとなっていたものがやはり中学生ぐらいにどんどん早くなっているのだろうなと感じています。そういった意味で、先ほどの主体性の話ですが、これは高校生だけではなく、中学校・小学校ぐらいから長い時間をかけて育てていかなければならない、先ほど岡田委員もおっしゃれましたがそういうものなのかなあっとこのことを感じながらお話を伺いました。それから井崎係長のお話を聞いて思ったのが、やはり高校魅力化ということは、もちろん町の魅力をアピールすることも目的だと思うのですが、高校生のために何ができるかという視点が最も必要であるということを改めて感じました。本当に感想だけですけれども以上です。
山添町長	ありがとうございます。ただ今の議題につきましては、私どもの方で検討してきた高校生魅力化ビジョンをご説明させていただいたと同時に、大迫先生からはそれを実現していくための方法論ということで、ご提言をいただくことができたのではないかと考えています。 そのご提言の内容というのが、恐らく高校がどうあるべきか、子ども達が主体的に学んでいくということをどう育てていくかという問題意識の中から、設定いただいた提案であったのかなあっと思っています。先ほど委員の皆様方からも質問がございましたし、この時間の中でこれを議論しつくすということは中々難しいと思いますので、ご提言の内容、そして各委員のご発言を踏まえて私たちの方でも改めて、精査をさせていただくと同時にビジョンを具現化していく、子ども達にとってより良い教育を展開していくということの視点に立った際に、我々がやらなければならないことは恐らく相違工夫をし続けなければならないということだと思いますので、その点については、これからの議論に引き継いでいきたいと思っております。 そして時間的な余裕が無い中ですが、議題（２）その他といたしまして、私の方から議題の提案ですが、先ほども長島教育長からもお話がございましたが、昨年の秋ごろから平田オリザ先生などとの意見交換を重ねながら与謝野町内でも文化芸術をより推進していこうじゃないかといったそういう議論をしてきました。その点について長島教育長から現状でも結構なので、若干報告いただけたらと思いますがいかがでしょうか。
長島教育長	失礼します。平田オリザ先生と秋の１１月にお出会いすることができないまま、今後の進め方について協議をさせていただきました。平田オリザ先生からの提案としましては、町内の６年生と１年生にまずご自身がこちらに来られて実践をすることが良いのではないかと、その姿を町内の先生方に見ていただく会が持てたらとおっしゃっていただいております。

担当	内容
	その後、第6波等の関係がございまして、中々具体的な今後の調整が出来ていない状況でございます。コロナの方が少し終息してまいりましたので、新年度に向けて具体的な動きといたしまして、先ほど申しましたような形の実践を令和4年度の早い時期にできればというふうに考えております。
山添町長	ありがとうございます。 それでは本日限られた時間ということでございますので、議題①、②につきましては、この程度に留めたいと思いますが、大迫先生最後に何かございましたらよろしくお願いいたします。
大迫参与	山添町長がビジョンの文章の中で、地域の深掘りがグローバル化に繋がると書いていらっしゃるってとても印象的な部分だったのですが、グローバルな世界中で生きていけるような子ども達というのは、地域の深掘をすることによって育てていけるんだという意味では、テーマとしていつかは戻ってきてということがあるかと思うのですが、まさに1回出ていってもかまわないけど、実は戻ってこなくても遠くからもしかしたら故郷をサポートする方法がこれからはあるかもしれないなあということだけちょっと思いました。 まだイメージですけども、町の財源が人口と関係してくるので、実は今日の提案もお金のかからないということを前提とした提案であったのですが、ただ外に出してあげる、用意をさせてあげるといった逆の発想も最終的には何らかの形で戻ってくる、与謝野町のために何かをしてくれる子ども達となるのではないかということ、ビジョンを読みまして最後の方にそのようなイメージも大事なのかなと思いました。
山添町長	ありがとうございます。皆様方から何かご発言がありましたら、よろしいでしょうか。 それでは令和3年度の第1回の与謝野町総合教育会議ということで限られた時間でございましたが、議題について皆様方と議論をすることができました。 先ほど申し上げましたように、この時間内で議論を終結させるということではできませんので、引き続き私たちの方でもそれぞれの皆様方からのご意見を精査をさせていただいて、ビジョンの具現化に勤めて参りたいと思いますし、どこかのタイミングでまたご報告させていただくことができればと思っております。 それでは本日の総合教育会議については、この程度で閉会させていただきたいと思います。 本日は皆様方、本当にありがとうございました。